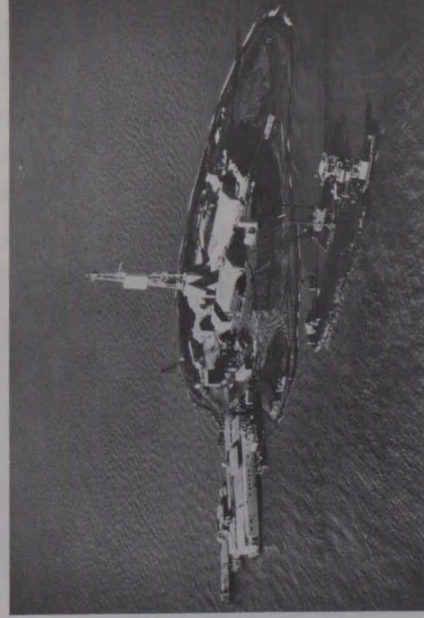
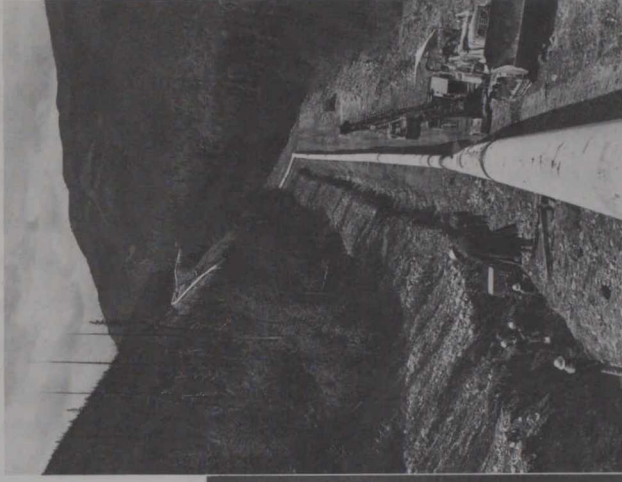


カナディアン・ロッキートを通じて産油地から消費地へ伸びるパイプライン。



北極・ポーフォート海の海底油田から採油するための人工島。

ト増えて、一九九〇年には約五千二百二十万キロワット時に達するものと思われる。

石炭とコークスの需要は、現在三千五百万米トン。毎年五・七パーセントほど増えて、一九九〇年には約六千八百万米トンの需要が見込まれている。カナダは豊富な石炭資源を蔵しているが、今後の開発には環境保護を考慮に入れた大々的な作業が必要となろう。

供給面では、カナダの通常原油以外の原油がどの程度開発されるか、ということが鍵となる。カナダの通常原油の保有量はここ数年減少傾向にあり、一九八〇年以後これらの油田から上る生産量は急速に減少していくものと予想されている。通常タイプ以外の原油(オイルサンド)に関しては、現在のところクレイト・カナディアン・オイルサンズ(GCOS)とシンクルードのプラントが唯一の確実な供給源である。これらのプラントの生産量は、一九八五年まで日産二万九千立方メートル(十八万バレル)の範囲にとどまるとみられている。そのほかには、GCOSとシンクルードのプラントの拡張、また、コールド・レークにおける第三のオイルサンド採鉱所と油層内採油所の建設、ロイドミンスター・タイプの重質油を予備精製する施設の建設などが期待されている。このようにいくつかの開発が進めば、一九八五年までにはさらに日産三万平方メートル(十八

重質油、軽質化重質油の可能生産量は、NEBの最低基準で、今年の推定量百八十万バレルをはるかに下回る日産十三万バレルと予測されている。NEBの予測にしたがえば、石油の輸入量は一九七九年の一日当たり約三十万バレルから、一九八五年には七十万バレルへ大幅に増加することになるだろう。

しかし、それでも、カナダは一九八五年までに石油の輸入量をエネルギー需要の三分の一以下に減らすというIEAへの約束を果たすことができるだろう。石油価格の高騰および非石油エネルギー資源の開発推進により、需要の上昇率は下るはずである。国内石油の供給については、通常石油の生産が徐々に減っており、沿岸海底および北極地域における探査・開発、重質油やオイルサンド開発の推進、確認済み原油に対する回収技術の向上などを通して、その分を補う必要があるだろう。カナダのエネルギー事情を変ずるはずであろうこうしたもろもろの開発は、莫大な資本を要する。

天然ガスの需要は、現在、一兆六千億立方フィートであるが、一九九〇年までには二兆三千億立方フィートに達するものと思われる。NEBの予測によると、国内生産でこの需要を満たし、さらに十兆五千億立方フィートにのぼる一九九五年までの既輸出契約だけでなく、追加輸出および国内における大幅な需要増加をまかなうことができるという。

電力の需要は、現在の三千百六十万キロワット時から、毎年およそ四・三パーセン

原油輸入量は、予測されていたより一日当たり七万五千バレルも少なく済んだ。カナダは、IEA(国際エネルギー機関)に対して石油の輸入を一九七九年および一九八〇年に予測されている量より五パーセント削減すると約束しており、その約束を履行するための強力なエネルギー節約策を実施している。

中期予測

中期的に見ると、原油および非通常石油の需要は一九七九年の一日当たり百八十万バレルから二百四万バレルに増えることが、一九七八年秋に発表されたエネルギー庁(NEB)報告によって予測されている。軽質油、凝質油、合成原油、重

オンタリオ州コールド・レークでのウラン採鉱。

